

奄美における地域メディア研究のための予備考察

—— 文化・メディア・ローカルアイデンティティ ——

加 藤 晴 明
寺 岡 伸 悟

はじめに

奄美大島は、台風の通り道として、また、かつて隆盛を誇ったナショナルブランドの着物・大島紬の産地として、また歌謡曲「島育ち」や「島のブルース」に表象されるようなエキゾチックな南の島として知られている。また、研究者の間では、豊かで独自性の濃い民俗文化や自然が残る地域としても知られている。例えば、奄美民謡研究の第1人者である小川学夫は、昭和36年に東京で開催された全国民俗芸能大会で奄美の民謡を聞いた際の経験を、後に以下のように記している。

「『奄美大島の民謡と八月踊り』の舞台だけが、今も昨日のこのように思い出される。私にとっては単なる感動というより、こんな音楽がこの日本にあったのかというショックにも似た感動であった。」(小川, 1984: 12)

奄美は、「日本の最南端」という地位は沖縄の八重山群島に渡したが、その濃厚な民俗文化の残基、生活文化のリアリティにおいて、日本のなかでも最も異色で魅力に富む地域であろう。

この奄美もまた、近代化と現代化、日本の社会の変容やグローバル化の波を被りながら、急速に変容しつつある。かつて、九学会が総合

的な調査（後述）に入った数十年前の奄美と、21世紀の奄美とでは経済・社会・文化・生活の景観に雲泥の差があるだろう。

筆者ら（以下われわれ）はこの奄美に、メディアと地域文化の関係という視点から関心を抱いた。それは後述するように、メディア概念だけでなく、地域や文化、さらにアイデンティティといった概念についての再考を迫られる過程である。さらにそれは、奄美をどのような観点からとりあげたらよいのか、という問いにつながっている。本論は、そうした問いや調査に向けての予備考察である。

1 節 研究対象の現況とこれまでの研究

奄美の概要

奄美群島は、鹿児島から380キロ（鹿児島～奄美大島航路距離）ほど離れ、沖縄にかけて浮かぶ有人8島からなる群島である。鹿児島と沖縄の間に位置するといっよい。最大の奄美大島は、712.43平方キロでいわゆる島として佐渡島に次いで大きな島である。沖縄島（通称沖縄本島、1208平方キロ）の60%ほどの大きさであるが、人口は沖縄島の115万に対して、66,770人（2010）。人口密度は沖縄島の10分の1といっよい。群島の最大人口は、昭和24年の226,752人で、2010年（平成22年）には118,773人にまで

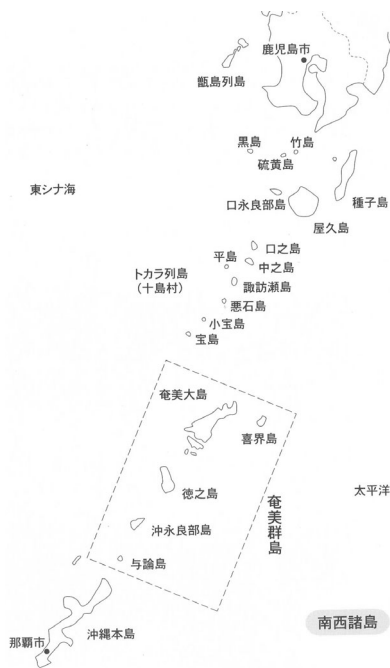


図1 奄美群島の地図「奄美もっと知りたい」から

激減している。2005年(平成17年)からの5年間で、7,710人の減少である。つまり群島全域で毎年1500名、小さな村一つが消滅している計算になる。とりわけ、奄美大島西部・南部の大和村・宇検村(うけんそん)・瀬戸内町の人口減少率(1955-2010)は60%を超え、宇検村では7割近くに達している。

代表的な産業としては「大島紬」がある。起源は、約1300年前まで遡るといわれているが、技術革新が進んだのは明治になってからである。大正末期が大島紬の最盛期といわれる。戦争を挟んで、日本に復帰した昭和28年(1953)年以降は再び活況となり、日本経済の高度成長期には大きな需要があった。奄美群島最大の歓楽街である屋仁川(やにがわ)通りでは、巨額の富を得た紳関係者がビールで足を洗った、という伝説が残っている。生産のピークはオイルショック直前の1972年(昭和47年)で、それ以降、とりわけ1985年以降は急速に減産となってきた。奄美大島で1975年に200万反以上あった生産は、2011年には8千反未満(生産金額で6億円余り)にまで落ち込んでいる。群島経済への大打撃が理解できる。

酒税法によって奄美だけに許されている黒糖焼酎は、1975年の移出額14億に比べて2010年には78億円近くに伸びているが、これも、焼酎ブームが過ぎた2006年からは減少に転じている。

奄美研究の蓄積

奄美にとって「奄美とはなにか」というアイデンティティ問題の起源は、「大和めくこと」を許されない非藩内化政策にひとつの要因があるとも言われる。それは、隣の島、屋久島や種子島との、そして琉球との決定的差異でもある。

奄美の歴史については、数多くの研究書が出版されている。またこの群島に対する膨大な民俗研究や郷土史研究の蓄積があることも、今日の奄美の大きな特色である。奄美の民俗紹介としては、すでに幕末に、名越左源太によって『南島雑話』という名著が書かれている(名越, 1984)。近年

表 1 奄美学の主要著作 (一部)

| |
|---------------------------------------|
| 昇曙夢 (1949) 『大奄美史』 奄美社 |
| 文英吉 (1957) 『奄美大島物語』 南島社 |
| 村山家國 (1971) 『奄美復帰史』 南海日日新聞社 |
| 恵原義盛 (1973) 『奄美生活誌』 木耳社 |
| 西村富明 (1993) 『奄美群島の近現代史』 海風社 |
| 鹿児島地方自治研究所編 (2005) 『奄美戦後史』 南方新社 |
| 『奄美学』刊行委員会編 (2005) 『奄美学 その地平と彼方』 南方新社 |

の奄美研究としては、九学会連合が、1955年～1958年と、1975年～1980年の二度、大規模な調査を実施している(九学会連合奄美大島共同調査委員会、1956)。その調査は、奄美の地元の郷土史研究にも大きな刺激を与えたという。ここで、それ以外の奄美研究の代表的著作の一部を記しておきたい。奄美研究が地域学として途切れること無く継続してきたことが伺われる。

共同研究の視座 地域メディア論の拡張、対象から視座へ

われわれは2008年から、奄美群島を対象地として、メディアと文化の連環に関する調査研究をおこなってきた。その狙いは、地域社会とメディア(情報)の関係を、より広い視野や角度で把握すること、いわばメディア研究と地域社会論・地域文化論との総体的な接合であり、そのことによって、地域メディア論をより動的なものにしたい、ということにある。さらにいえば、そうして拡張された地域メディア論のダイナミックな視点からのアプローチこそが、「奄美とは何か」という問いに迫る有効な道筋ではないか、というのが我々の予感でもある。

奄美と地域メディアの関係は、ある意味「単純な物語」として語ることも可能だ。それは、「奄美には濃厚な自前の文化があり、その文化的アイデンティティの発露としてメディアが存在する」という物語、シマ唄や八月踊りなどの民俗芸能・民俗文化への注目を、伝統文化への「覚醒」として語り、奄美というアイデンティティを表出するメディアが奄美の地域メ

ディア (新聞・ケーブルテレビ・コミュニティ FM) なのだ, という物語である。

そうした奄美の地域メディアと文化の連環, そして地域メディアとしての役割は十分に評価できる。確かに, 島に二つの日刊紙 (南海日日新聞・奄美新聞 (旧大島新聞)) があることは, それ自体が大きな意義をもっている。さらにケーブルテレビが2局, コミュニティ FM が3局存在する。「メディアの島」という表現は, それだけでも間違っははいまい。

しかし, 「奄美の語り部」は, 既存のマスメディア型の地域メディアだけではない。広大ともいえるメディアの裾野がひろがっており, それらとつながるように文化の裾野も広がっているのである。地域メディアは地域のローカルアイデンティティの語り部だ, という物語を基軸に据えつつも, 我々はまず「地域メディア」といった概念自体を拡張する必要性を提起してきた (加藤・寺岡 2010)。

地域メディアの全流域を考える 地域メディアの総過程

上記の「狭義の物語」にとって都合の良いメディアとその実践例を組み合わせて, 既存の解釈枠組みに流し込むのではなく, 地域の中にどのようなメディアが存在し, それがどのように相互関連し, そして地域の人びとや, 人びとの背景にある文化と関係しているのか。そうした地域におけるエージェントの全域が, 地域メディアの全域であると捉える必要がある。島のマスメディアから, ミニコミ, ネット系メディアといった発信側の多様性だけでなく, 情報流通を可能にするプラットフォームにあたる情報インフラ企業なども含めそれらを情報流の全域として捉えようとする視野の必要性である。また奄美で暮らす人びとは, 島のメディアだけではなく, ナショナルメディアや, 鹿児島県のメディアも併用する。島の情報は, 島内の人向けにだけに発信されるのではなく, ナショナルメディアの島内支局を通じて, 鹿児島県に, また全国に発信される。つまり, 地域メディアは, 地域だけのメディアとして完結しているわけではない。加藤・寺岡 2010

では、こうしたひとつの地域内でメディアが積層している構造を「メディアの垂直構造」と名づけた。また、それらメディアが外向けに、また内向けに相互連環しながら情報を発信していく様子を「表出の螺旋」と呼んだ。

さらに、このような情報の流域を過程論的に捉えていく具体的な観点を、加藤・寺岡 2010 で「地域メディアの総過程」と称した。更に地域メディア事業の生成と持続過程を図 2 のように整理した (図 2)。

こうした視点から推察されるように、この視座では、メディア立ち上げの動機・社会的背景や、コンテンツとして奄美「文化」までが分析対象に含まれることとなる。つまり、地域社会学・地域文化論との接合を意図した結果として、文化そのものや文化活動、さらに意識までが分析の視野に含まれることとなった。いま一つは、メディア概念の拡張という方向性から、文化を伝える「人」もメディアであるという考え方に立ち、彼らを「文化メディアーター」と捉えることにもつながった。

こうした枠組に基づいた考察を進めていく際に用いる概念。そのうちのいくつかはフィールドにおいて当事者が自らの語りのなかに織り込んでくる言葉でもある。の意味領域を把握する作業が必要であろう。それが本稿の目的でもある。そして上記の過程に関わる概念を、たんに先行研究を渉猟・整理するかたちではなく、奄美の地域メディア文化研究という我々のフィールドと研究目的に沿いながら、いくつかの概念についての議論を整

| 大項目 単位としての事業 | 中項目 事業への 4 視点 | 小項目 4 視点の詳細 | 基本概念 背景概念 の検討 |
|----------------------------------------------|--------------------------|----------------|---------------------|
| ある人物 (組織) が地域メディアプロ ジェクトを開始 し、持続する。 | (ア) 動機・目的・ミ ッション (使命) | a.背景 | |
| | | b.転機 | |
| | (イ) 資源の動員 | a.地域内部からの動員 | |
| | | b.地域外からの動員 | |
| | (ウ) 成果の蓄積 | a.内部蓄積 | |
| | | b.外部蓄積・・・流出 | |
| | (エ) 持続の課題 | a.ディレンマとの遭遇 | |
| | | b.ディレンマの克服 | |

図 2 地域メディアの生成・持続過程 (加藤・寺岡 2010 より一部改訂)

理し、本研究にとっての意味合いを考えていきたい。

2 節 「地域」と「ローカル (地元)」

本研究において、常に避けてとれない概念は「地域」や「ローカル」である。しかし周知のように、これらの概念は多義的である。例えば、area, community, district, local, region などの英語との対応も状況によって幅がある。以下では、そのうち「地域」と「ローカル」の語についてその多義性を一瞥し、若干の整理を試みたあと、奄美の事例を念頭に、この2つの概念がどのように交錯して語られるかを論じたい。

地域概念の多義性・多層性

地域メディア研究の基礎概念の一つである「地域」。著者の一人はかつて現代社会における「地域」概念の位相について考察を行ったことがある(加藤, 1996)。そこで指摘したことは、地域やローカル(後述)が、極めて主観的な概念であることに留意すべしということであった。

例えば、地域を以下のような要素の集合体として定義することが可能であろう。

地理的現実としての地域 ...物理的現実としての地域。

制度現実としての地域 ...社会的現実としての地域。

記号的現実としての地域 ...言説や表象として描かれる地域(書籍, 新聞, 雑誌, テレビ, HP), ゲートキーパー付きの記号としての地域

記号的現実としての地域 ...ネット内で、エピソードとして口語的に語られる地域(例: ブログや掲示板の中で綴られる地域, ナラティブとしての地域), ゲートキーパーを伴わない記号としての地域

意識的現実としての地域 ...想像の共同体としての地域

このように、地域は多層な次元で成立する。そしてその多層性が織り合わさりながら、それぞれの地域はローカリティ(地方色・地域固有性)を

表2 複合的現実としての地域

| | |
|-------------|-------------------------------|
| 複合的現実としての地域 | 1. 地理的現実としての地域：物理的現実としての地域 |
| | 2. 制度的現実としての地域：社会的現実としての地域 |
| | 3. 記号的現実としての地域：言説と表象の総体としての地域 |
| | 4. 記号的現実としての地域：ナラティブの総体としての地域 |
| | 5. 意識的現実としての地域：想像の共同体としての地域 |

発揮していく。それを促進していくものが、後で述べるような地域固有の伝承文化 = ローカル文化のアイテム群である。

ローカル概念の多義性・多層性

さて、場所を表す類似表現として、「ローカル」・「ローカリティ」という言葉がある。通常の言説のなかでは、「地域」と「ローカル」はほぼ重なる概念として使われることが多い。しかしあえて差異をつけるとすれば、ローカルは、文脈に応じていくつかの意味が強調されて用いられている。

まず一つは「地元性」・「日常性」としてのローカルである。

ローカルは、グローバルの対比概念としても用いられる。そのため「地域固有性」や「地方色」といった意味で用いられることもある。例えば、「地域のポピュラー音楽」、「ローカルなポピュラー音楽」といった表現で、「ポピュラー音楽は、『デトロイト・テクノ』、『マイアミ・ベース』のように、しばしば特定の文化的ローカリティを表現しながらも、グローバルに流通する。」(木元玲一, 2007: 127) といった使い方をする。こうした使い方における「ローカル」や「ローカリティ」は、「その地域固有の」または「その地域らしさ」を意味している。

しかし、その「ローカル」の世界で暮らしている人にとって、それはもっとも身近で日常的なコンテキストである。つまり「地域」と同様、「ローカル」も、ともに固定的な内容をもった概念ではない。先述のように、人々にとってそれが意味的概念でもあるからだ。そしてそれは、時に愛着(attachment)を生じさせる概念でもある。また、「コンテキスト(文脈)」

という概念とともに議論した方が良いと考えられる場合もある。これは「リアリティ」の構築とも関わりをもち、メディア概念と地域概念の結節点にも位置する重要な概念である。こうした議論を先取りして述べれば、ある人にとってコンテキストが存在することがリアリティであり、コンテキストが、ある物理的なエリアに準拠して成立する時、その空間は特定の人々にとって意味ある場所となる。それが「場所 (place)」であり、同時に「ローカル」と表現される場合もある、と整理できるのではないだろうか。

意味縁とネットワーク

したがって、ローカルコンテキストというのは、ある意味で二重の定義であるとも言えよう。それは、会話が成立する話題 (テーマ・トピック) とも関係する。共通の話題 (会話のアイテム=トピック群) があることが、そこでの社会関係にコミュニケーションがなりたっていること、ある意味域の存在を示す。

しばしばある集団のなかで、特定の地域的つながりや趣味的つながりで話題が盛り上がり、まわりの他の人と共通の話題が成立しないとき、私たちは「ローカルな話題ですみません」などと言ったりする。

こうしたローカルがなりたつ会話のアイテムは、「縁」にかかわる話が多い。血縁、地縁、学校縁、会社縁、趣味縁である。これら人の縁=会話の成立する関係=コンテキストは、地域性がなくとも成立する。ちなみに、コンピュータを媒介にしたコミュニケーションが始まった、1980年代後半以降の情報社会論・ネット社会論が提起してきた「つながり」論やコミュニティ論は、こうした、新しい「縁」のかたちを提起したものだ。関心縁、趣味縁、話題縁である。総称して「機縁 (きえん)」ともいう。そうした機縁のかたちは、比較的狭い近隣社会だけではなく、そしてネット空間だけではなく、社会的に市民・文化・趣味活動を活発に行う人々の間でも、また、家族・地域・学校から離脱して第四空間という「通りすがり」

の縁に求めることもできた。上野千鶴子『女縁が世の中を変える』や宮台真司『まぼろしの郊外』、富田英典『インティメイト・ストレンジャー』などがそうした地縁を越えた縁の存在を浮かび上がらせてきたことは記憶に新しい。

コンテキストと居場所

エドワード・ホールは、『かくれた次元』（1960 = 1970）のなかで、人間は自分の体の延長物として作り出し、その新しい次元の世界を創り出し、そこをテリトリー（棲み場）とする生き物であることを指摘した。その新しい次元は、同時に新しい感覚世界、新しい文化の世界でもあるという。このホールの新しい次元としての棲み場は、われわれがコンテキストとして理解してきた地域・ローカルのひとつの側面と重なり合う。

また藤竹暁は、『現代人の居場所』（2000）で、物理的な空間としてのスペースと、人間が生きていくために必要な場所としてのプレイスとを分けて考える必要を説いている。そして自分のアイデンティティ確かめる場所が「居場所」であるという。その居場所にも、「他人によって必要とされている場所」としての「社会的居場所」と、「自分を取り戻すことのできる場所」としての「個人的な居場所」とを分けている。最近の多くの居場所論も、ほぼ藤竹の視点と同様である。

われわれは、人にとって意味ある空間としての居場所とは、「自己確認、自己承認の場所である。私は、自己物語を構築する場所として位置づけている。平たい言い方をすれば、テリトリーとは、自分を自分としてさらけ出す = 自分の思うように構築する"馴染みの場所"である。」（加藤晴明，2003：109）

もちろん、地域は、それほど自由ではなく、居場所であればあるほど、コンテキストがはっきりする。つまり、どこの誰かがわかる世界である。だからこそ、人は時に地域を牢獄と感じて「地域からの解放」を求めて地域からの離脱を、都会の盛り場やネットという盛り場に求める。

アンソニー・ギデンズは、近代という社会の特徴として「脱埋め込み化」と「再埋め込み化」を挙げたが、それは、まさに、地域＝ローカル＝明確なコンテキストからの離脱の側面と、しかしながら、自己の承認が明確に得られるコンテキストのある世界への再編入としてのローカル化を意味していた。

極論すれば、人にとっての居場所や意味域、つまりコンテキストは、人の準拠点となるものといえる。安定したコンテキストをもてない人は、自己の準拠点が安定しない。

われわれは、メディアとは「自己に輪郭を与えるもの」、自己の準拠点という考え方をとっている。「メディアとは、自己を仮託する文化装置である」(加藤晴明, 2012)。そうしたメディア観からすれば、地域もまた自己に準拠点を与えるという意味でメディアである。出身が重なると、共通の話題やトピックが頻出し、会話が弾むことになる。最近流行している街コン(ある特定の地域で複数のお店が連携しての合同コンパ)も、マチ＝地域＝ローカルを共有することで、話題・トピックが重なり合い、そのことで互いの自己と自己が重なり合いやすいからであろう。ネット社会の進行するなかで、逆に街コンが流行することは、ひとつとが、ネット空間だけではなく、自己のわかりやすい実感出来る準拠点を求めていることを証左しているのかもしれない。

地域とローカル

このように、「地域」と「ローカル」は、それぞれ別の概念としてありながらも、その多層性・多義性によって互いに交錯するような形で 状況依存的に 用いられている。私たちはそれを単純に用法の混乱とは考えていない。なぜならその交錯した用法のありよう自体が、現代のリアリティ・奄美のリアリティの一面を示していると考えからである。

地域やローカルをめぐる現象を考察する際、現時点で我々が重要な観点としているものは以下の3点である。

ローカルコンテキストは、第一義的に個人に準拠して成立する。

地域に準拠するローカルコンテキスト群。

地域 = ローカルも、集落（小字）から自治区（大字）、そして基礎自治体（市区町村）から広域自治体（都道府県）、そして国、さらには国家連合まで多層に成立する。また、学校縁も、こうした地域に準拠したローカルコンテキストである。

地域に準拠しないローカルコンテキスト群。

社会活動やネットも、テーマによっては地域性をもっていることが多い。お店のお話（トピック）で盛り上がるネット上の会話などは、それを知っている人々、つまりそのお店とコンテキストを形成できる人々のあいだでの会話の盛り上がりとなる。つまりそうした脱地域であるはずの話のコミュニティも、ある地域性をもつことになる。

多層性から奄美を考える

さて、「奄美」「あまみ」は、その指示対象だけを考えても厄介な概念である。すでに「メディアとパトリの島・奄美」（加藤・寺岡，2010）でも、われわれは「奄美」という範疇が多層に成立することを指摘した。奄美群島内で、あるいは奄美出身者のなかで、「奄美」という語彙が想起させる範疇は、三つの位相があるように思われる。それぞれの位相は、「奄美」というカテゴリーがもつリアリティの範疇でもある。

奄美の位相

- ・シマ（集落）としての「奄美」...集落の生活が強い自給性・自律性と、郷土意識をもっていた時期のリアリティ
- ・奄美大島とその周辺としての「奄美」...奄美大島と周辺の島々（加計呂麻島・請島・与路島）といった範囲でのリアリティ
- ・奄美群島としての「奄美」...奄美群島と明記される場合のリアリティ、群島外から奄美を総称するときのリアリティ

そしてさらに、島と島の関係、それを政府間関係になぞって「島間関係」

と名づければ、その島間関係からみても、奄美は一元的な関係とはならない。喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島からみれば、奄美大島は「大島」である。しかしそれは、「鹿児島県大島支庁」が存在する島としてのリアリティをもつに過ぎない側面もある。群島外との境界概念として「奄美」はなりたつが、それぞれの

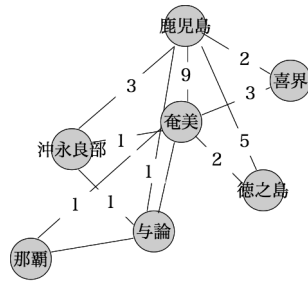


図3 奄美群島をめぐる航空便の現状 (2012年8月20日) 出発便本数

島のリアリティからすれば、奄美群島は個々の島としてある。それが「奄美アイデンティティ」を困難にしている。道の島は、まさに海の道 = 海上交通・交流の道沿いに配置されている。併置されているといってもよく、各島が対等な関係にあるともいえる。

さて、そうした道沿いの島としての奄美は、大和 = 鹿児島でもなく、沖縄でもないが、かといって統一した強固な統治機構とその制度的な文化システムをつくることはなかった。

奄美群島のなかでも、与論島と沖永良部島は、沖縄文化が色濃いといわれる。また喜界島も、奄美大島とは文化的にかなり異なるとされる。琉球との繋がりをいまだに遺構（琉球氏族の住居跡）に残す島である。その意味では、沖縄島（沖縄本島）を中心にして比較的放射状に交通圏が成り立ち、かつ歴史的に首里を頂点にした統一王朝を形成した琉球とはかなり事情が異なっているのである。

今日の奄美群島の島間関係の構図は、航空便でみるとわかりやすい（図参照）。航空便の密度からみても、基本的には、群島の各島は鹿児島を起点にした放射状の関係である。また与論島では、那覇空港行きがでている。

こうした「奄美」位相のリアリティを、上述の地域・ローカリティなどの幅のある概念によって読み解いていくことが、これからの課題となろう。

3 節 文化とメディア

従来の地域メディア研究は地域文化研究とはほとんど接合されないまま、研究交流もないままに展開されてきた。我々はこれに対し、地域情報の背景の厚み = 文化的苗床に着目することの重要性を指摘してきた。伝承される文化、発信される文化があるからこそ、地域メディアは活躍する。われわれが文化メディエーター（媒介者）に着目する必要があると考え、そうした文化の伝承者や文化の創発者、語り人にインタビュー調査を続けてきたのも、地域メディア学を、地域からの独立変数として扱いたくなかったからである。

しかし、あまたの先行研究を紹介するまでもなく、この「文化」という言葉も多義的である。さらに、それが発信される情報 = コンテンツとして眼差された場合、それはメディア（メディエーション）概念とともに互いに交錯して用いられる。とくに本研究の観点から言えば、文化の標準化（メディア化の浸透）のなかで、特定の文化アイテム群が再発見・再強調・再創造される点である。

ローカルコンテンツとしての文化

文化とメディアの交錯のなかで、我々は下記の7つの領域が「伝承文化」として強調されることを見てきた。民俗的な文化は、「地域性」、「地域固有な世界」と重なる文化と位置づけられ、それは「ローカリティ」の内容物とも記号ともなる。伝承文化については、民俗学で様々な議論がなされてきたが（平山和彦，1992）（福島真人，1995）、以下の7つは、とりわけエスニシティ研究などでも顕在化してきている要素であると考えられる。

すでに推察されるように、民俗文化は、近代化・都市化・標準文化化の荒波のなかで、「現代的伝承（変容的伝承 = 継承と創生）」の形をとらざるをえない。それは、民俗文化がこうむらねばならない試練（ハードル）と

表3 「民俗文化」のアイテム

| | |
|---------------------------|------------------------------|
| 民俗文化 (ローカルティ)の アイテム | ことば (方言・島口) |
| | 食べ物 (フード) (今日的には郷土料理として再構成) |
| | 歌謡 (古謡・民謡) |
| | 舞踊 (祝祭と重なっていることも多い) |
| | 武道 |
| | ファッション (容姿・衣装・小物) |
| | 祝祭 (祭り 今日的にはイベント) |

いってもよい。集落が自然村として成立しえない今日においては、例えば、習い事とイベント (大会) 抜きに唄 (島唄・民謡や三味線) の伝承はありえず、郷土料理はレシピとして継承される。

だが、そのイベントすらも、新しいムーブメントに浸食されつつあるのは事実である。民謡に対する地域のポピュラー音楽 (地場産業・地場文化としてのポピュラー音楽)、そしてその一方で、舞踊は、よさこいやエーサーのような流行の標準型の舞踊が浸透してくる。

たとえば、名古屋のよさこい祭りである「にっぽんど真ん中祭り」の場合、地域の民謡を一節入れることになっているが、それが地域固有文化というわけではない。よさこいは、「よさこい型文化」という標準化された文化を形成したとわいていい。といっても、ステージ演舞とパレード、囃子以外に規制はない。そこには、「よさこい型文化」内で、チームカラーとしての多様性が認められる。しかし、それにもかかわらず、ほとんどのよさこい踊りは、よさこい踊り的な枠の中で、歌舞いている。だから、よさこいチームは、全国行脚が可能なのだ。歌舞伎的な振りや、ジャズダンス、タンゴ、ミュージカルの展開など、いろいろなダンスの要素を組み入れつつ、よさこいはよさこいである。

奄美のフードも、今日では、全国的な流行も取り入れながら、「奄美らしい」フードとして発信される。

つまり、文化とはメディアーションされるものであり、その過程で、文化はイノベーション (変容と革新) される。文化発信・情報発信とは、苗

床にある文化（民俗文化の古層）が、今日的に変容しつつ伝承され、発信されていくプロセスのことをいう。それが、文化のメディアエーションプロセスであり、その担い手が、媒介者（メディアーター）である。これは白水繁彦が、変容エージェントと名付けた「担い手」と重なり合う。

メディアコンテンツ化された奄美文化 観光のまなざし

こうしたメディアと文化の交錯点を捉える学的試みとして、近年、観光研究が盛んになってきた。なかでも、雑誌メディアに現れた地域文化表象への着目はもっとも重要な方法の一つであろう。本格的な研究については別稿にゆずりたいが、以下では、観光雑誌が奄美をどのように表象したのか、について一瞥しておきたい。

実は奄美は観光雑誌の「主役」という位置づけを与えられることは少ない。世界遺産と日本の最南端という記号を抱える沖縄や、同じく世界自然遺産を抱える屋久島の陰に隠れるかのようだ。もっともポピュラーな観光ガイドである『るるぶ』は「屋久島・奄美・種子島」、『まっぷる』は「屋久島・奄美大島・種子島」をタイトルとして編まれている。表紙の写真も、屋久杉や屋久島の森であり、ヘッドコピーも「縄文杉への道」「ネイチャー体験」であり、最上段のコピーは両誌ともに「世界遺産の森、…」である。奄美の紹介に関しては、『まっぷる』の表紙の最後の片隅に、「奄美大島 サンゴ礁で遊ぶ!」の隣に「島唄・郷土料理体験」のコピーが出てくるだけである。いまや観光雑誌の中の奄美は、「サンゴ礁の海」「コバルトブルーの海」として表象されている。

こうした観光雑誌に表象される奄美は、若い世代の奄美の観光客の多くを占めているのかもしれない。年配の客なら、大島紬と昭和歌謡としての「島育ち」で表象される島かもしれない。確かに、奄美でも、観光用の宿やペンションは、マリンスポーツを売りにした宿が多い。奄美のいくつかの海岸や集落は、サーフィンスポットとして知名度をあげている。

こうした最近の奄美の表象体としての観光雑誌は、かつて大島紬の縞と

して知られた高度成長期（それでも、1973年のオイルショック以降だが）のそれとは大きく異なる。奄美群島では1975年頃から、広告代理店勤務を経験してきた写真家の松田幸治が写真と編集者・発行者を担う観光シリーズが鹿児島市の南國出版から一挙に刊行されている。松田は、1975年に『奄美の世界 松田幸写真集』を出版している。『奄美大島』の他にも、『与論島』『沖永良部島』『徳之島』『喜界島』『屋久島』がシリーズとして刊行された。1972年の沖縄返還によって、「日本の最南端」の地位と記号を失った奄美群島が、その危機感を反映して刊行した観光ガイドブックだったのか否かは、いまのところ分からない。与論空港の使用開始が1976年5月であり、若者にとっての与論島ブーム最中である。僻地ブーム、離島ブーム、そしてヒッピーブームと、若者が元気に旅をしていた時代でもあった。

松田は、『奄美大島』の編集後記にこう結んでいる。

「この小冊子は、“島めぐり”のなかで、少しづつ集めた写真に郷土研究家の協力執筆を得て「島」シリーズの全体像を描こうと企画・編集したシリーズものです。…本書を比較することにより多様性の強いといわれる南の島々の個性が浮き彫り出来ればと思います。旅の意識も変わりつつある昨今、より個性的な旅を求める旅人の良き案内書になればと願う次第です。」

郷土研究会が執筆していることから、内容も今日の観光雑誌に比べ、民俗により焦点をあてた構成となっている（項目：奄美へのいざない、自然と観光、郷土芸能、まつり、行事、奄美の原風土、歴史と民俗、民話、くらしと産業、奄美諸島婦人の入墨、島に生きる、請島、与路島紀行、奄美民謡の背景、島の味、おもな特産品とおみやげ品、奄美の方言、宿案内）。

奄美の詩人・文芸批評家として知られる藤井令一（『奄美文芸批評』を2010年に南方新社から出版）は、巻頭の「奄美へのいざない」で、奄美の魅力を次のように表している。

「そんな異邦的な感傷と同時に、島の内がわからず、すべての人の心

に潜む深い郷愁をしっかりと埋めてくれる、日本の原質の染みついた懐しみも旅人に感じさせてくれるのです。それは、本土が已に失って取り返すすべもなくなった貴重な、人がまだ国境や種族を意識し始める前の古く懐かしいリズムを内包しているからです。奄美こそ日本人の心のふるさとである、と言えるのではないのでしょうか。」(前掲書：3)

ここでは「原質の染みついた懐しみ」という表現に注目したい。近代化や都市化が失った「古く懐かしいリズム」、それは、「太古のリズム」でもあるのだろう。「奄美こそ日本人の心のふるさと」。こうした表現は、奄美文化の古層を、日本の古代大和との繋がりに求める言説とも共通する。言語的に日本の大和言葉が残っている島とされるからだ。

35年前の観光雑誌を引用したのは、奄美に惹きつけられる者たちにとっての奄美の魅力が、現代の観光雑誌によって表象されるだけではなく、むしろ松田が編集・出版し、郷土史家たちが描いた、かつての奄美の姿の残照にあるからだ。今日の奄美は、35年前とは大きく異なる。しかし、奄美ファンというリピーター的な島好きには、奄美のこの「古代文化」の魅力に惹かれる者も少なくない。

これ以後も奄美ではたくさんの観光誌が発刊され、奄美イメージを内外に供給してきた。これら、観光文化メディアと観光文化メディアーターの調査研究も本研究内で継続中の研究課題である。

文化と文化メディアーター

拡張された地域メディア論研究において、「人」の捉え返しはきわめて重要な方法的戦略となっている。私たちの共同研究では、Keith Negus (1996) らの研究を参考にしつつ、「文化メディアーター」という概念を用いることで、狭義のマスコミ業界関係者とは異なる「人」の捉え方の具体化を試みる。たとえば上述の観光ガイドブック制作者もその範疇にはいる。簡単ではあるがこの概念について要点を挙げておきたい。

- ・メディアとは、文化を媒介していくメディエーター（媒介者）＝文化メディエーターによる情報伝播の媒介実践プロセスである。
- ・文化メディエーターは、担い手としての個人あるいは組織エージェントやプロジェクトである。
- ・媒介実践（メディエーション）とは、「伝承・創生」の現代的なプロセスである。
- ・現代における文化伝承は、農村型社会におけるそれとは異なり、文化メディエーターによる意識的・意図的な伝承であり、創生＝新しい文化の発信と不可分なかたちで実践される。

地域メディアの総過程論は、文化メディエーターの総配置図と重なって描かれねばならないといえる。そしてそれは、民俗学がこれまで研究してきた<文化伝承>や<伝承母体>の議論に新しい視点を提供するものであると考えられる。

4 節 アイデンティティとローカリティ

この節では、「アイデンティティ」概念の多層性・多重性を、ローカリティとの局面で考察しておきたい。

奄美を考えることは、たとえば本州の離島文化や農山漁村文化を語ることとは異なる複雑さをともなっている。沖縄研究には、こうした視点からの豊富な研究蓄積がある。それらの考察においては「エスニック・アイデンティティ」という語がしばしば登場する。さらにそこに「メディア」という観点を加えた先行研究としては、フィールドはハワイであるが、白水繁彦らの研究が注目されよう（白水編，2011）。ここでは、こうした研究をひとつの参照点としながら エスニシティ概念の適用可能性に対する考察を交えることで ローカリティとアイデンティティの、奄美的広がりについて考察していきたい。

前述のように、日本におけるエスニック・コミュニティやメディアの研究では白水繁彦らの研究がよく知られている。ハワイの沖縄コミュニティに照準にしたオキナワン・コミュニティの研究である。そこでは、確かにエスニシティという説明フレームがよくあてはまる。またディアスポラというフレームも説明力をもつ。

沖縄メディア研究からの視点

沖縄の場合、ヤマトに対するウチナーとしての差異の感覚が強い、と言われる。しかし現在の沖縄のメディアのなかで、そうした民族＝エスニシティが強く表出されているかといえ、それはあたらないただろう。少なくとも、沖縄の地域密着型のコミュニティFMやケーブルテレビなどに、そうした強いエスニシティ意識があるとはいえない。あるにしても、それを表にだしてメディア事業の特性を演出しているとはいえない。まずそれらの運営方針は「生活密着」である。圏域のAM放送局である「沖縄ラジオ」の場合でも、一貫したそのスローガンは「ローカルに徹せよ」である。この方針自体は、日本の他の地域のラジオ局でも変わらない。そのうえで、沖縄独自のローカルを成立される契機の強さがあり、さらにその延長にエスニシティとして「琉球」、「ウチナー」がある。

沖縄にはコミュニティFMが多い(2012年4月現在で16局：加藤調査による)。人口比でみると日本で一番多い県である。そのなかには「FMたまん」のようなウチナーぐち(沖縄の言語)を意識的に3割程度取り入れているラジオ局もあるが、例外的である。そして「FMたまん」がエスニックメディアというわけでもない。「FMたまん」の10周年記念誌『開局10周年で～びる』(2006)には沖縄の多くのコミュニティFM関係者の言葉が寄せられている。その1人沖縄コミュニティFM界の重鎮であるエフエム二十一の石川丈浩は、「コミュニティ放送の原点とも言える地域に密着した放送にこだわり続け、その放送内容はまさに「沖縄」を感じる放送であり、地域の人々を始め、放送を聴く全ての方が「うちなー」という

ものを改めて思い出すことでしょう。」(前掲書:8)とメッセージを寄せている。また初代社長で実質的なオーナーともいえる照屋信吉は、「伝統行事や、文化的なもの多くには、方言でしか伝わらないニュアンスがあります。地域の言葉(うちなーぐち)に自信と誇りを持って、必要な情報を自分たちで発信し続ける。そんなFMたまんで、ありつづけてほしいと思います。」(前掲書:13)と語る。

こうした語りだけをとりだせば、こうした言説からヤマトに対するウチナーという意識を読み取ることはできるし、文化的な自律化の触媒、ウチナー・アイデンティティの覚醒触媒としてラジオを位置づけているとも読むことができる。しかし、『開局10周年で~びる』で頻出する言葉は「地域」、「地域密着」、「地域住民」、「地域の伝統文化」、「ローカル」である。

つまり、ここには、ヤマトに対抗するウチナーというエスニシティ的な自己表出と、地域文化の発信や地域生活に密着しているというローカリティの表出の、二重の自己表出があるのではないかと思われる。厳密には、「ウチナー」という包括的な自己の輪郭をめぐる自己表出のひとつのアイテムが、「ヤマトに対するウチナー」というエスニシティ的な強調なのだといえないだろうか。

ここでいう「ローカル」な文化は、民俗学が対象としてきた伝統文化(例:琉球古謡など)だけを意味するのではない。すでに、都市化・グローバル化の波を被っている現代の沖縄では、民俗文化とグローバル文化の複合、つまり、そこから生み出されるグローバル文化(シマ唄・沖縄ロック・オキナワンポピュラー音楽)としてのローカル沖縄文化がある。ローカル自体が、複合的な文化という多義性・多層性をもっている。例えば、那覇文化協会の『那覇市文化協会創立15周年記念誌』(2007)をみると、28部会3000名の会員がいると紹介されている。しかし、琉球民謡芸能と八重山芸能の二つだけが琉球文化に特化した組織である。もちろん、この二つの部会では、それに参加する個別の会(流、会、保存会、伝統音楽協会、研究所など)の数は多い。しかし、社交ダンス、

大正琴，詩吟，写真，民謡，文芸など，沖縄以外の地域にも一般にある文化協会の構成団体と変わらない部会の方が圧倒的に多い。人が享受する文化は，ローカル文化だけでも，エスニック文化でもないのだ。

現在の沖縄本島の文化そのものをエスニシティというフレームで説明することには対しては，（われわれは現在の段階の知見では）無理があると考えたい。現在の沖縄は，アメリカ文化の影響も含めて複合的（ハイブリッド）な文化の島である。しかし，そのなかでもヤマト（日本）化の度合いは強い。その意味では，オキナワン・カルチャーは，強いローカリティや郷土色の強い文化としてあるとした方が包括的であると考えたい。その郷土色という地域固有性の大きな，しかしひとつの要素がエスニシティ（ヤマトに対するウチナー）という要素だとしておこう。繰り返して述べれば，ローカル・アイデンティティをめぐる自己表出，つまり自己のローカル性への境界づけのひとつが，エスニシティ的要素の表出である。そうしたエスニシティという語を語る時の，その当該地域での語彙のリアリティに留意する必要がある。

奄美への視点

本節において，まず沖縄のローカリティとエスニシティに触れたのは，奄美をどう位置づけるかという位置測定の意味で重要な作業だと考えたからである。すなわち，以下のような仮の問いをたてることが，私たちの研究においても可能だということだ。たとえば，

- ・「奄美人（あまみんちゅ）」は，エスニック・アイデンティティなのか？
- ・奄美アイデンティティの承認を求める運動は，マイノリティ・ナショナリズムなのか？
- ・奄美の郷友会は，エスニック・コミュニティであり，彼らはディアスポラなのか？

こうした問いは，奄美とその文化，文化表出のエージェントを評価する際に一定の意味を持ちえる。

表4 奄美の時代区分

| |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>「奄美世 (あまんゆ)」8~9世紀くらいまでの、階級化が進む前の共同体の時代 「按司世 (あじゆ)」按司という首長の支配が割拠する階級社会の時代 「那覇世 (なはゆ)」琉球王朝時代。奄美大島は1440年前後、喜界島は1464年といわれる。 「大和世 (やまとゆ)」1609年の慶長戦争により、薩摩の支配下に入って以降の時代。 「明治・大正・昭和期」 「戦後アメリカ統治期」1946年の本土との行政分離により北部南西諸島群政府の管轄時代。 「日本復帰以降から現代」1953年に日本に復帰し、再び鹿児島県大島支庁がおかれた時代。</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

まずそれを考えるために、奄美の歴史がどのように解釈されてきたかを一瞥してみたい。奄美の歴史は、沖縄とは異なる。しかし、「ヤマト」の歴史とも大きく異なっている。

奄美が日本の歴史に登場するのは古事記まで遡る。「あまみ (海見)」(657年)、「あまみ (阿麻弥)」(682年)といった記述である。だが、種子島、屋久島が律令国家に組み入れられたのに対して、奄美は、遣唐使船の航路としての意味を与えられたにすぎなかった。そして、それ以後、約1000年近く日本史の射程には入ってこない(上村幸雄, 2004: 9-13)。

奄美では、大和と琉球に挟まれたその特異な歴史は幾つかの段階に分けて語られる(表4)。

上記のなかで、島唄の背景についての唄者たちの語りのなかでしばしば登場する「大和世」は、「薩摩の圧政に苦しむ時期」であった。1613年に代官がおかれ奄美の島々を大島奉行が統治しはじめる。薩摩による支配は、明治4年の廃藩置県まで260年間続くことになる。その統治は、島人を媒介にした2段階統治であったという。島人の一部を島役人として統治に組み入れる支配体制をとったのである。

1745年に「換糖上納」により、米で納める税を黒糖に換算して納めることが決定され、さとうきびが主作となった。米との交換比率は、薩摩に

都合良く、奄美には厳しいものとなった。こうした黒糖生産による収奪を徹底するために、島役人を郷土格に取り立て、彼らの家人（債務奴隷）による生産方式を認めた統治をおこなった。日本の歴史のなかで、奴隷を使った植民地プランテーションが実施された希有の事例とされる。奄美は薩摩にとっては、同化を許さない植民地支配の対象となったのである。

奄美には一文字姓が多い（純田，2005）。薩摩は、琉球に対して「大和めきたる」名字・「日本風な容姿」を禁止した。琉球では、二字・三字姓であったのに対して、奄美では、一文字である。この扱いは、冊封体制の中国への公文の都合という解釈もある。ただ、弓削によれば、武士格とはみなされない郷土格や一字名字は、薩摩藩内で奄美が「集団としての異国人」として支配の対象として扱われたことを物語るといふ（弓削，2005）。「大和めきたる」ことを禁止され、かつ、清への冊封国家としての名目を維持した琉球からも分離された奄美は、帰属すべき国家という点においては非在の島であった。

上記「大和世」についての語りも含め、奄美の歴史的位相の特徴を挙げると以下ようになる。

統一王国を形成しなかった。

琉球と薩摩（ヤマト）による二重支配

明治以降においても継続的な薩摩・鹿児島県の管轄下にあり、県としては独立しなかった。

近代日本への組み込みが、琉球処分（明治12年）を契機としていない。

鹿児島県内にあって、異質な伝承文化アイテムをもつ。

独自の伝承文化アイテムはあるが、伝承も含めてヤマトとのつながりの深さもある。

明治以降のキリスト教の普及。つまりアイデンティティ承認をカトリックに求め、それが一定の普及をきたすという歴史がある。（つまり、奄美と薩摩・ヤマト以外の第3の文化的アイデンティティを受容する道が

一定程度の力をもった。)

以上が語られる歴史面からみた、「奄美」の位置取りである。

奄美アイデンティティの多義性・多層性

こうしたことから、「奄美アイデンティティ」というものの多重性・多層性を考えてみたい。こうしたアイデンティティの表出は次の三層のレベルで考えてみることができるだろう。

1. 一般的な地域個性という位相で、突出した個性あるローカリティをもつ「奄美」の主張
2. 薩摩との対置の位相で、薩摩に同化しえない独自のローカリティをもつ「奄美」の主張
3. ヤマトとの対置の位相で、エスニシティレベルでの固有な「奄美」の主張

しかし、ここまで述べてきたことから理解されるように、奄美の場合、沖縄と異なり、ウチナーとナイチャーといった差異が明確にならない。そうした意味空間にあたかも浮かぶように存在する言葉が「島 (シマ)」である。

奄美二世で、夏休みには祖父母が暮らす奄美の離島に帰省し、奄美の田舎町の男性と結婚したある女性 (40 歳代) は、その町ですっと「あの子は、島の子じゃないから」と言われたという。ここで注目したいのは、この「島の子」という言葉の持つニュアンスである。実際、「奄美んちゅ」(意味：奄美の人) という語は、沖縄のウチナンチュ (沖縄の人) のように頻繁には用いられない。使われる語は、「島」・「シマ」なのだ。

奄美大島にライブハウスを作り、島のポピュラー音楽のレーベルをつくり、コミュニティ FM を立ち上げた麓らは、島の音楽文化を発信するイベント「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュッ!!」を奄美や東京で繰り返し実践してきた。その音楽イベントのタイトルが示すのは、まさしく「今宵は島の人に敬意を!」である。それは「奄美アイデンティティ」の表出の

場としてデザインされている。

参加者は、奄美出身のアーティストたち（大部分がポピュラー音楽とシマ唄の唄者）、そして観客は若い奄美出身者たち（郷友会主宰のイベントに比して世代的に若い世代ともいえる）および内地にいる奄美好きの人たちだ（2008年4月、2010年5月、東京・全労済ホール）。

麓憲吾は、「夜ネヤ」のイベントで「島は島っちゅ」のものだと表出する。われわれのこれまでの調査で、まだ確定的なことはいえないが、その時の、「島っちゅ」に込められた奄美アイデンティティは、2を媒介にした1だと思われる。もちろん3の要素も全くないとはいえないだろう。しかし、奄美エスニシティや奄美ナショナリズムは、奄美のアイデンティティをめぐる語りのなかで強いリアリティをもっていないように思われる（もちろん、その度合いは、立場によって異なるのであり、変容するのかもしれない）。

沖縄では、サラリーマンの酒のみ話の定番が、「琉球の独立」であるという。基地問題をはじめとして、「琉日関係」という語がリアリティをもつのである。そうした沖縄との差異と比較するとき、奄美の歴史は、薩摩への非同化が、ヤマトへの同化と奄美の固有性の主張との二重のベクトルを共存させることになったのかもしれない。『奄美自立論』を書いた喜山荘一は、「二重の疎外」という言葉を使って、琉球でもヤマトでもない奄美を定義する。

「二重の疎外は、…『どちらでもない』という二重否定であるため、島人の自己規定は「大和」に寄るか、大和でも琉球でもない残余のような「奄美」に寄るとい形を取ります。」（喜山、2009：31）

喜山のいうように、奄美アイデンティティは、「四百年の失語」としてあったのかもしれない。確かに、2008年の慶長戦争400年は、沖縄・奄美の新聞が大きく報道したのに比べて、日本のマスコミは全くといっていいほど取り上げることはなかった。台風以外で、奄美がヤマトの情報流通間に強く表出されることは少ない。

「奄美」は他方で、群島の中の奄美大島を意味する。それぞれの島では、「大島」と自分の島との差異の意識をもつ。その意味では、「奄美」は、群島のひとびとの生活のなかでは、群島を表象する語彙として使われているわけではない（加藤・寺岡，2010）。喜山もまた、「奄美」が対外的には奄美大島に収斂されてしまうことを意識している。彼は、他の群島の島とが対等になる、島とシマが主役になるイメージをもっている。こうした群島ネットワークは、麓らが「あまみFM」での実践をもとに、奄美群島コミュニティFMネットワークを構想しているのにつながる意識である。

また、関西の多言語コミュニティFM放送「FMわいわい」で奄美・沖縄情報の番組を制作とDJを長く勤め、まろうど社の社主でもある大橋愛由等は、奄美とアイデンティティの困難さに関わる論述を、次のように始める。

「奄美はアポリアの地なのだろうか。北は 薩摩 鹿児島 ，南は 琉球 沖縄 という強烈な個性を持つ二つの政治・文化圏に挟撃され、時に激しく翻弄された歴史を持っている。さらに近代以降は、日本という近代国家体制の中に組み込まれ、「地方」としての地位を甘受していく。…奄美は、半永久的にアイデンティティを模索しつづけ、漂流し続ける 場所トポス なのだろうか。」（大橋，2003：348）

大橋の指摘は、奄美の歴史的な位相をよくあらわしている。我々は奄美を、「非在のナショナリズムの島」と位置づけているのだが、それは、薩摩 鹿児島と琉球 沖縄に狭間で、それに対峙しえる強固な統一奄美の政治システム・文化システムを構築することなかった奄美の位相を指してのことである。

独自の歴史的背景やそれへの解釈、そして現状と複雑に切結ぶ奄美意識。それは、また個人レベルでも多様であるだろう。われわれは、これまでの奄美調査で、まだ奄美アイデンティティをめぐって早急な結論を出すことはできないと考えている。

5 節 郷土愛とメディア

ここまで繰り返し述べてきたように、地域メディア総過程の研究は、関連するいくつかの概念の再考察を私たちに迫る。地域メディアプロジェクトの実践の背後にあるミッション（使命感）や、それを支える「郷土意識（郷土愛）」も、そうした考察の重要な対象である。

地方新聞は、しばしば「郷土紙」と称される。奄美を代表する日刊紙『南海日日新聞』もその一つであろう。その記者たちが奄美の文化の優れた担い手であることは確かだ。

『南海日日新聞五十年史』（1997、南海日日新聞者）の冒頭「発刊によせて」で、社長の村山三千夫は、「奄美の郷土紙として本紙は、創刊の理念に「南（みんなみ）の海の日輪たらむ」との志を秘め、報道・言論をつうじて郷土復興に微力を尽くすべく創刊しました。」と記している。同社の綱領も最後に「斯くしてわれらは言論による近代化のために闘い、もっと郷土紙としての信頼を昂揚せむことを指標とするものである。」と結んでいる。

郷土の新聞、そうした郷土紙を島のほとんどの者が読んでいるということ。アンダーソンが『想像の共同体』で提起した出版資本主義と想像の共同体の相関、出版ナショナリズムの形成というアイデアにたてば、郷土紙は、郷土ローカリズム（ミニナショナリズム意識）を醸成する。

こうした郷土紙という狭義のメディアだけでなく、奄美における多様な文化の担い手たちの郷土意識の高さと、それに準拠した文化プロジェクトも注目される。たとえば上述のアーマイナープロジェクトやあまみエフエムの実践は、近年ナショナルメディアから注目される事例の一つである。セントラル楽器という地元音楽レーベルもまたひとつの文化プロジェクトであるし、それはまた地元文化への強い愛着によって支えられている。

奄美のメディアに関する最初の論考ともいえる金山智子の「離島のコミュ

ニティ形成とコミュニケーションの発達：奄美大島編」では、奄美に自前のメディアが必要された理由を、「他者の目でもなく、他者の口でもなく、他者の耳でもなく、自己の目・口・耳で奄美のアイデンティティを見いだすための装置としてメディアが必要とされたのだとも言えるだろう」と解説する(金山, 2008: 18)。金山は奄美のメディアが共通に奄美の文化を誇りと自信をもって語っていると指摘する。われわれの調査でも、それは既存の新聞、ケーブルテレビ、コミュニティFMといった島のマスメディアだけではなく、文化メディエーターたち全般にいえることであった。

そうした思いは、島のなかだけではなく、出身者コミュニティや出身者ネットワークとしても展開されている。郷友会の存在は、愛郷心に強く支えられている。そうした奄美と出身者と島をつなぐメディアに、南海日日新聞が毎月発刊する『月刊奄美』がある。16頁からなるこの月刊新聞は、奄美の活性化やイベントの最新情報、訃報の他、郷友会の記事にも大きなウェイトが割かれている。こうしたメディアの存在は、郷土愛によってメディアが支えられているとともに、これらのメディアによって郷土との連携が再構築されるという再帰的なプロセスを物語っている。

松本健一は、パトリオティズム(郷土愛)はナショナリズムを超える強い概念だという。

「ナショナリズムは、…人為的、近代的な要素が強い思想である。これに対してパトリオティズムは、自然的な郷土意識、郷土愛に根ざした感情といえる。」(松本, 2002: 178)

松本のこの指摘は、郷土愛は、アイデンティティ形成にとって最も強く明確な準拠点を与えるもの、人にリアリティの準拠点をあたえるものと読み替えることができよう。

「パトリオティズムというのは、それほど人間にとって根強い、原初的な感情なのである。それは、人間にとってのアイデンティティの非常に大きな部分をかたちづけている。…それはパトリが人間を生かす実体的な記憶だからだ。正岡子規の文章にあったように、故郷の人

びとの顔や、城の天守閣、寺、小川、山、祭りの感情の情景などがつまっている。」(松本, 2003 : 200)

こうした郷土愛は、ローカルアイデンティティとほぼ同義といえるかもしれない。またそれは、自分はどこ出身者なのかという出身地域に関わる自己の準拠点であると捉えることができるかもしれない。

今日、ネット社会の進行のなかで、再びリアリティの拠点として、また自己アイデンティティの拠点として「郷土」が注目されている。そうした論者の代表、丸田一は、現実空間のウェブ空間化の進展のなかで、地域や場所について徹底した検証を行った。そして、ウェブ空間によっても浸食されない現実空間の「残域」が「郷土」であるという(丸田, 2008)。以下、丸田の議論を辿ってみよう。

丸田は、個人が「遷りかわる場所」と「帰るべき場所」の二分法から場所を捉える。「遷りかわる場所」とは、いわば、人が幾つもの自己(キャラクター)を演じる場所である。それは、ある種の存在に意味を与える空間、つまり私が私として生きる空間となっているが、それは同時に、自己=複数のキャラクターの集合体にとって不安定な場所でもある。ウェブ空間が現実空間を浸食していくなかで、その活動世界は、「混在郷」(ヘテロトピア)と化している。一方、「『帰るべき場所(故郷)』とはなんだろう。『故郷』は、現実の場所を離れ、各人の記憶のなかに漂っている。『帰郷』とは、生まれ育った土地に帰ることではなく、記憶のもととなるモラトリアム期の『基調的な個人』に帰ることである。そこは、複数の個人を抱える大人が常に参照し続ける場所の祖型である。」(丸田, 前掲書 : 8~9)

丸田は、故郷と帰郷、そしてその帰郷のための現実的な「地域」づくりを提起する。故郷への帰郷を、記憶や記録のなかに留めるのではなく、土地に準拠してそうした帰郷にフィジカルなリアリティを与えることを提起している。丸田によれば、故郷とは、自らのルーツであり生涯にわたる心の拠り所であるという。

「人は生まれ育った地域(土地)で言葉を覚え、食べ方や挨拶などの

作法を身につけ、自我を形成し、行動様式や世界との対峙方法を獲得する。」(丸田, 前掲書: 228)

「故郷とは、母の顔、食卓、通学路、友だちの家、小学校の校庭、空の色、水の匂い、言葉、繰り返し見た夢など『内面に宿る情景』であり、生まれ育ったモラトリアム期の身体化された記憶が、故郷の実態なのである。」(丸田, 前掲書: 229)

「ファスト風土化」や「マクドナルド化」が進む現代社会で、今日残されているのは、地域(場所)から遊離した「記憶としての故郷」や、ネットのなかで綴られる自己物語としての「記録としての故郷」にすぎない。丸田は、それでは記憶と場所の断絶性は解消されないという。そして改めて、「土地としての故郷」の大切さを提起するのである。自己の物語の真正性が参照できる、参照に耐える現実空間としての故郷がなければ、真正性(リアリティ、自己コンテクスト性と言い換えられるかもしれない)は担保されない、と述べる。

さらに一方で、丸田は、複数の個人(キャラクター)をつなぐ「共通の場所」を提供する社会装置が、地域メディアであるという。地域のメディアによって「共通の場所」=いわば繋ぎ=リングをつくることで、現実空間の多元化からの脱却を進めるのだという。つまり、ウェブ化、ヴァーチャル化する諸空間を、地域が準拠されることで統合していこうとする戦略だと考えられる。

「ウェブ空間が作り出す『記録としての故郷』とともに、地域が「土地としての故郷」となることで「帰郷」が日常化し、私たちはようやく安心を半分だけ手に入れる。『残域』には、しっかり『郷土』という役割が残りそうである。」(丸田, 前掲書: 243)

こうした丸田の議論は、ギデンズの「再埋め込み」=リアリティの獲得、コンテクストの獲得を「故郷」の現代的な創生に求めるもの、と読むこともできよう。丸田の議論は、ウェブ社会の進展をしっかりと見すえ、それを踏まえ併用するかたちでの地域の創生を論じている点で、単純な地域コ

コミュニティ論を超えた現代性がある。

丸田の故郷論や故郷に対する愛着論は、非常に重要な提起であろう。私たちは奄美に標準をあわせ、丸田と同様の問いを考えつづけてきた。社会が標準文化化し、ファスト風土化する。それは奄美も同様である。その一方で、表層の変化を被りながら、地域の文化の古層（自然村＝シマの伝承文化）は、同様に変容しつつも、しぶとく残基として息づいている。そんな民俗文化の今日の変容のしたたかさと、その古層にある文化的な苗床の存在感が、現在の奄美であると考えられる。

おわりに

さて、以上、「ローカリティ」を強くもつ「奄美」をどう捉えるかという問いを立てた時に、われわれが目配りしなければならない概念について考察を行ってきた。しかしここでの予備考察は、社会学やメディア学などの視点に限られている。政治・経済とまだまだ理論的な問いはありえよう。離島経済論や島嶼学などもある。もちろん、奄美をめぐる「奄美学」と称される民俗学の膨大な蓄積がある。

しかしわれわれの問題関心だけに絞っても、奄美という対象は、対象への認識の多層性・多義性とそれを分析すべき概念の多層性・多義性の両方をあらわにしてくれる存在である。その双方を見つめながら、ひとつの地域社会を学術的に認識する作業を深化させていきたい。

追記1：本論文は、はじめに～3節を加藤晴明（中京大学現代社会学部）、4節～おわりにを寺岡伸悟（奈良女子大学文学部）が分担執筆し、全体を共同で討議・修正して整序した共同執筆論文である。

追記2：本論文の加藤晴明執筆部分は、平成23年度（2011年度）中京大学特定研究助成「地域メディアの維持活性化と地域文化・地域社会に果たす役割：島メディアを準拠にして」にもとづいてまとめられた。

注

1 離島には多様なメディアが存在することは意外に知られていない。特に注目したいのは、日刊新聞の存在とコミュニティ FM の多さである。県の新聞を県紙や地方紙というが、こうした郷土紙は地域紙といわれる。日本のなかで、日刊の地域紙があり、しかもそれが圧倒的な購読率を誇る地域は、離島などに特殊な地域に限られる。南の離島では、石垣島にも二紙、宮古島にも二紙がある。奄美には、「南海日日新聞」の他に、「奄美新聞」(旧大島新聞)の二紙がある。対馬、五島列島、隠岐の島なども離島の新聞が健在である。こうした、離島における地元郷土紙の圧倒的な購読率という構図は、沖縄県の場合も同様である。沖縄県の「琉球新報」「沖縄タイムス」の二紙があるのと似ている。離島の新聞購読者にとっては、県紙のなかの地方面面ということでは満たされない理由があることになる。県紙が半日ほど遅れてくること(地理的条件)、そして、地域の現実＝リアリティ(歴史や風俗も含めた、地域の社会経済政治的な固有の事情)が、県庁のある本土と異なること(生活的条件)。郷土意識(社会意識的条件)この3点が、島に新聞が必要とされる理由だと思われる。

もうひとつ島の新聞について指摘しておかねばならないことは、それが直接の文化資源であるというだけでなく、高学歴者の貴重な雇用の受け皿になっていることである。島の文化産業に携わる人のなかには、新聞社に在籍していたことがある人が意外に多いのはそのためである。

参考文献

- 藤竹暁編集(2000)『現代人の居場所』至文堂
 福島真人(1995)『身体構築学』ひつじ書房
 平山和彦(1992)『伝承と慣習の論理』吉川弘文館
 井上忠司(2012)『「縁」の人間関係 文化心理ノート』書肆クラテル
 伊藤幹治(2011)『贈答の日本文化』筑摩書房
 金山智子(2008)『離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達 奄美大島編——』『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディーズ』駒沢大学グローバルメディアスタディーズ学部
 加藤清明(1996)『情報の現実としての"地域"』『社会と情報』5, pp.92-110.
 加藤清明(2003)『電話風俗とテリトリー』『テリトリーマシン』河出書房新社
 加藤清明・寺岡伸悟(2010)『メディアとパトリの島・奄美～地域からの情報発信とその文化的苗床との連環を焦点にして～』『中京大学現代社会学部紀要』第4巻第1号, pp.81-139
 加藤清明(2012)『自己メディアの社会学』リベルタ出版

- 上村幸雄 (2004) 『日本史, 世界史の中の奄美』 松本泰文・田畑千秋編 『奄美
復帰 50年 ヤマトとナハのはざままで』 至文堂
- 木元令一 (2007) 『日本におけるラブ文化の自律化』 遠藤薫編 『グローバルイ
ゼーションと文化変容』 世界思想社
- 河井孝仁 (2009) 『地域メディアが地域を変える』 日本経済評論社
- 喜山荘一 (2009) 『奄美自立論』 南方新社
- 九学会連合奄美大島共同調査委員会 (1956) 『奄美の島々』 毎日新聞社
- 丸田一 (2007) 『ウェブが創る新しい郷土』 講談社現代新書
- 丸田一 (2008) 『場所論』 NTT 出版
- 松本健一 (2002) 『民族と国家』 PHP 新書
- 南海日日新聞社五十年史編纂委員会 (1997) 『南海日日新聞社五十年史』 南海日
日新聞社
- 名越左源太 (1984) 『南島雑話: 幕末奄美民俗誌』 国分直一, 恵良宏校注, 平凡
社
- 小川学夫 (1984) 『「民謡の島」の生活誌』
- 大橋愛由等 (2003) 「奄美 島尾の棘 を抜く」 西成彦/原毅彦編 (2003)
『複数の沖縄』 人文書院
- Keith Negus (1996) *Popular Music in Theory: An Introduction*. Polity
Press = (2004) 安田昌弘訳 『ポピュラー音楽理論入門』 水声社
- 白水繁彦 (1998) 『エスニック文化の社会学』 日本評論社
- 白水繁彦編 (2008) 『移動する人びと, 変容する文化』 お茶の水書房
- 白水繁彦 (2011) 『イノベーション社会学』 お茶の水書房
- 白水繁彦編 (2011) 『多文化社会ハワイのリアリティ』 お茶の水書房
- 純田宏 (2005) 「奄美群島の名字について」 「奄美学」 刊行委員会編 『奄美学』 南
方新社
- 東谷護 (2008) 『拡散する音楽文化をどうとらえるか』 勁草書房
- Jean Lave and Etienne Wenger (1991) *Situated Learning Legitimate periph-
eral participation*, Cambridge University Press = (1993) 佐伯胖訳・福島真
人解説 『状況に埋め込まれ学習 ~ 正統的周辺参加』 産業図書
- 松田幸治編 (1980) 『観光ガイドブック 奄美大島』 南國出版
- 弓削政己 (2005) 「奄美の一字名字と郷土格について」 「奄美学」 刊行委員会編
『奄美学』 南方新社